

中條俊希先生の「高等学校数学科における「行間を読む・補う」 という学習方略・態度の指導」について

愛知教育大学 青 山 和 裕

中條先生は数学の問題を解く際の式変形の過程に注目し、生徒が式変形の根拠について考えたり、それらをきちんと表現することに焦点を当てて実践を進められた。模範解答を見ても式変形の根拠が分からず理解できないということはよくありますし、自分が取り組んでいるときにも根拠をきちんと意識し、それを第三者にもわかるように表現するというのはとても大事なことです。事後の調査からも生徒が行間を意識しながら取り組むことができるようになってきている様子を窺うことができ、数学に対して向き合う姿勢が育っていることが感じられます。

難しいと思うところとして、生徒にとって式変形の根拠をどこまで書けばいいのか加減が分からない点が挙げられます。模範解答はある意味で生徒が自分で解答を書くときのお手本でもあるので、それよりも詳細な解答を書くことが常に必要というわけではありません。見せる相手が数学が苦手な友達なのか、採点をする先生なのかで書き方を変えることができると素敵だと思いますが、なかなかそこまでの余裕も持てないのが現状だと思います。中條先生には行間を読むことができる力を育成しながら、できるだけ負担の少ない指導方法について今後検討していただきたいと思いました。